

## マスターズを彩るレジェンドたち(9)

年が明けて令和3年。新型コロナウイルス流行の新年となったが、マスターズ会員の皆さんは元気で基礎訓練の冬期トレーニングに工夫を凝らしているはず。マスターズの大会ではないが、12月の山陽女子ロードレース(岡山)のハーフマラソンで田中美香さん(50歳・兵庫)が1時間20分59秒のW50クラスの日本新を出した、とうれいニュースが原稿締め切りぎりぎりの時間に飛び込んできた。年末のビッグニュースだ。

写真提供/角南昌弘さん、田中美香さん、BBM

“兄貴”のように慕われ  
投てきの名手だった  
小島義雄さん(兵庫)

1981(昭和56)年、山梨県甲府市であった第2回全日本マスターズ選手権の50～54歳の部・砲丸投と円盤投に出場した小島義雄さん(兵庫)。当時、川崎重工のサラリーマンで50歳だった。兵庫マスターズの会長を引き受け、日本連合の監事も務めた。

M50・砲丸投で12m44、円盤投では35m56と2種目に日本新Vで初優勝を飾り、砲丸投でのこと。小島さんはサウスポーのフォームで砲丸を突き出していった。この小島さんの一投一投に目を凝らしていた同じ投てき仲間一人が声を掛けた。

「あなたのフォームは実に素晴らしい。落ち着いて投げれば優勝できますよ」。結果はこの人の言葉どおりになったのだが、小島さんは笑いながら「いいアドバイスをいただいて、ありがたかった」。

実は小島さんは元五輪選手で投てきが専門。褒めた人はそれが分かって「大変失礼なことを言って」と低姿勢で小島さんのところへ。小島さんは法大時代の1953年に砲丸投で14m16と19年ぶりの日本新を出し、川崎重工に入社後の1956年には14m70の日本新を出すなどの傑物だった。

さらにハンマー投でも1953年に52m33と日本新を17年ぶりにマーク。以後、1956年の55m80まで日本記録を伸ばした。1956年のメルボルン五輪ではハンマー投に出場した。

### ●小島義雄さんのクラス別日本記録

| クラス | 種目  | 記録    | 年齢・樹立年      |
|-----|-----|-------|-------------|
| M45 | 砲丸投 | 10m61 | (49歳・1980年) |
|     | 円盤投 | 32m80 | (49歳・1980年) |
| M50 | 砲丸投 | 12m68 | (50歳・1981年) |
|     | 円盤投 | 35m56 | (50歳・1981年) |

▽砲丸の重さ=M45は7kg260以上、M50は5kg443以上、▽円盤の重さ=M45は2kg以上、M50は1kg500以上。

鹿児島県出身の小島さんは、出水高の高校生だった頃、戦後数年の物資不足の時代でさ

つま芋が主食。自宅から学校までの片道12kmを下駄履きか裸足で。陸上の投てきで頭角を現し、1949(昭和24)年のインターハイに出場した。

会場の大阪・中モズ競技場は雨が激しく降っていた。砲丸投のサークルは現在のようにコンクリートではなく土だったため、シューズやスパイクを履いている選手も滑って苦心していた。

小島さんの場合は裸足なのだ。1、2投目を突き出すのが、足が滑ってうまくいかない。思い余った小島さんは顧問の遠竹保先生に向かって大声を張り上げた。

「草鞋わらじを持ってきてください！」  
「えっ？」と驚いた先生は、いきなり「ここにいないよ」とお手上げの体。「よし、それなら」と奮起した小島さんは、滑るサークルに足を踏ん張らせ、12m83を突き出して2位となったが、悔しさしか残らなかった。それだけインターハイに懸けていたのだ。インターハイまでに高校記録の13m56を上回る新記録を数回出し、最終的に13m75まで記録を引き上げ、インターハイには自信を持って臨んだ



川崎重工時代の小島さん(後列左)

のだ。新聞紙上に躍った活字は『薩摩隼人、ノースパイクで敗れる』。

高校卒業後、土木関係の仕事をして学費をためて法大に進学した苦労人。法大時代は179cm、86kg。川崎重工へは1955(昭和30)年に入社したが、同社は1961年にあらゆるスポーツの対外試合禁止の方針を打ち出し、陸上も実業団の雄だったが下火に。

小島さんは、その体格とスポーツマンで統率力ありと認められ、1977(昭和52)年から2年間、地中海に面したアルジェリアに労務管理の総責任者として赴任した。帰国後、マスターズ陸上が発足。兵庫マスターズの会長兼選手として、M45・砲丸投に10m61、円盤投で32m80の日本記録を出した。

会長としては1カ月に1回の合同練習を開くなど「会員の皆さんのため」と率先して会場に立ち、指導にも精を出した。第3回全日本大会でもM50・砲丸投で12m35、円盤投に33m50で2種目に連勝。周りの人から“兄貴”のように慕われた小島さんだったが、1993年に惜しまれながら62歳で世を去った。

## 記録への情熱を持ち続ける 渡川孝子さん(77歳・徳島)

激しい争いとなったW35・100m。割れんばかりの拍手と声援の中を肩を並べてゴールへ。1980年の秋にマスターズ陸上の発祥の地、和歌山市で幕を開けた第1回全日本マスターズで二人が争ったW35クラスのプリント争いは大会のハイライトの一つ。

二人とは渡川孝子さん(37歳・徳島)と、高橋恭代さん(35歳・和歌山)。渡川さんは旧姓・林。光華短大(京都)の学生だった1962(昭和37)年に、400mで日本人女性として初めて1分を切る59秒5を出し、日本選手権の第46回大会の優勝者でもある。

一方の高橋さんの旧姓は三嶋。日体大卒業後の1969年に同じ400mで56秒5の日本新をマークし、第53回日本選手権で頂点に立っている。1971(昭和46)年の和歌山国体では、きょ火リレーの最終走者を務めるなど、人気抜群だった。

レースは先行する高橋さんを、スタートで出遅れた渡川さんが追う展開。二人がほとんど同時にフィニッシュラインを駆け抜けた。白熱したレースのタイムは共に13秒4。気になる結果は着順判定で渡川さんが1位、高橋さんが2位で落ち着いた。

レース後の二人は「しんどかった。現役時代のレースより、よっぽど緊張しました」と口をそろえた後、仲良くカメラに収まっていた。渡川さんは1978年、和歌山であった西日本マスターズで16年ぶりに大会に出場し、100m13秒6で1位。翌年も13秒4で連勝。この大会でも第1日の走幅跳で5m18を跳んで優勝していた。

走幅跳はマスターズになってから手掛けた種目。圧巻は45歳で1988(昭和63)年の京都国体に出場したときだ。マスターズの部ではない。成年女子共通の走幅跳に徳島代表としての出場だった。若い年齢層の強豪との争いなので、入賞には届かなかったが、5

m52を跳んだ。

渡川さん自身が「やった!」と思ったのも当然だった。W45の世界新だったのだ。京都国体には少年男子A三段跳に長男・浩志さん(鳴門高3年)も同じ徳島代表で出ており、“親子の共演”として話題を提供した。長女・佳子さんも武庫川女大時代の1989年の関西インカレで800mに優勝。1962年に400mで1位になった母親・孝子さんに次いで“親子V”を果たしている。

先に触れたように孝子さんは林姓の頃、400m59秒5(1962年時点、国内歴代1位)、800m2分20秒5(同、同4位)のベストを出し、400mで4回、800mで

は2回の日本記録を打ち立てている。子どもたちは母親の血を引いたのだ。

第1回全日本マスターズで女子最優秀選手に選ばれた渡川さんは、その後、家事などで多忙だったのか、しばらく姿を見せなかったが、地元の鳴門市であった第6回全日本マスターズで再び登場、大活躍した。

42歳になっていた渡川さんはW40・100mに13秒5、走幅跳は5m66と大台を跳んだが、追い風参考となった。もう1種目はやり投で27m08と3種目に勝ち、2回目の女子最優秀選手に。その後は第8回全日本大会でW40・100m13秒45の日本新、走幅跳5m26は大会新、やり投28m96で3位の戦



渡川さん(旧姓・林)は光華短大時代に1964年の日本選手権400mで優勝。59秒8は当時の日本新記録だった(左から3人目)。マスターズでも種目の幅を広げて活躍する

### ●渡川孝子さんのクラス別世界・日本記録

| クラス | 種目      | 記録          | 年齢・樹立年      |
|-----|---------|-------------|-------------|
| W35 | 100m    | 13秒4(手)     | (37歳・1980年) |
|     | 走幅跳     | 5m18        | (37歳・1980年) |
| W40 | 100m    | 13秒4(手)     | (44歳・1987年) |
|     | 4×100mR | 54秒8(四国/3走) | (44歳・1987年) |
|     | 走幅跳     | 5m55        | (43歳・1986年) |
| W45 | 100m    | 13秒1        | (45歳・1988年) |
|     | 走幅跳     | 5m52※       | (45歳・1988年) |
|     | 三段跳     | 11m11※      | (45歳・1988年) |
| W50 | 200m    | 28秒33       | (50歳・1993年) |
|     | 走幅跳     | 4m81        | (50歳・1993年) |
| W75 | 100m    | 16秒18(+0.5) | (75歳・2018年) |
|     | 走幅跳     | 3m50(+0.9)  | (75歳・2018年) |

※は世界記録、(手)は手動記録

績を残した。44歳のときだ。

1993年(平成5)年の宮崎での第10回世界ベテランズ大会では、W50・200mこそ28秒37で3位だったが、走幅跳に4m81で1位となった。やり投にも挑んだが、23m36で8位以下、日本人同士では5位だった。

近年では2018年に鳥取で行われた第39回全日本大会でM75クラスの100m16秒18(+0.5)で6年ぶりの日本新を。60m10秒08(-0.3)、走幅跳3m40(+1.4)は共に大会新で3種目を制し、通算3回目の女子優秀選手を射止めた。77歳の今も、マスターズ陸上に情熱を持ち、記録への挑戦に燃えている。

### 田中さん(兵庫)がハーフマラソンW50クラスの日本新を樹立

昨年12月号で紹介した田中美香さん(50歳・兵庫)が12月20日に行われた岡山・山陽女子ロードレース大会のハーフ(21.0975km)マラソンで、1時間20分59秒で完走した。実業団の選手が多数出場するなかで69位のゴールとなり、同記録はマスターズのW50クラスの日本記録。従来の記録は1時間23分27秒で7年ぶりに大幅の更新。

田中さんは11月に足を痛め「練習不足でしたが、納得のいくタイムが出せてうれしい。すべて相談に乗ってくれる(マスターズ) 駅伝監督の北垣章さんのおかげです」と感謝の弁。

